

非対面ピア・レスポンスにおける人間関係の構築と維持の特徴
Analysis of how students establish relationships
with classmates through on-line peer response

浅津嘉之 (同志社大学)

Asazu Yoshiyuki (Doshisha University)

1. はじめに

近年、ICTやSNSの発達にともない、インターネット上でのコミュニケーションの機会が増えている。ネット上では、カメラやマイクを使って映像と音声によって行うやりとりもあるが、e-mailをはじめ、facebookやtwitterなど、文字でのやりとりも多い。前者は、相手と実際に対面して行う会話と同様、発せられる言葉に加え、相手の表情や動き、声の高さなども情報伝達手段として機能するが、後者はほとんどが文字によるものである。また、今夏の国政選挙でtwitterなどのSNSを使った選挙活動が解禁されたことにもあるように、文字による情報の受信・発信の機会が今後も増えていくことが予想される。このような社会においては、ネットリテラシー、特にネット上で自分の考えを書いて伝えたり、書かれたものを読み取ったりするコミュニケーション能力が重要になると考えられる。

日本語教育では、学習者の多様化をきっかけとした教育パラダイムの転換が唱えられて久しい。三代(2009)によれば、日本の労働人口減少に応じて、留学生の受け入れモデルが「途上国援助モデル」から「定住化モデル」に変化し、今後は留学生が日本社会へ参加していくことが予想されている。このような状況の中で、日本語教育は、技術や能力の獲得ではなく、「日本語によるコミュニケーションを通じた他者との出会い、対話、関係性の構築とそれにともなう関係の中での自己の変化、経験全体の意味づけ」(三代2009:90)といった「学び」への転換が指摘されている。実際の教授方法としては、協働学習の一種であるピア・ラーニング、中でも作文教育においてはピア・レスポンス(以下、PR)が注目されている。PRとは、作文の推敲のために学習者同士がお互いの書いたものを書き手と読み手の立場を交替しながら検討する活動(池田・館岡2007)であり、学習者同士が話し合いを通して学んでいくプロセスや効果が実践・研究されている(富永2012, 原田2011など)。

本研究は、上述のような社会状況で必要とされる「文字によるコミュニケーション能力」の育成を目指し、日本語教育における新しい文章表現授業のデザインを考えたものである。具体的には、インターネット(LMSやSNSなど)を使って授業時間外にクラスメートと行う非対面PR(浅津他2012)を文章表現授業に

取り入れ、その活用方法を模索する。

非対面 PR に関係する先行研究としては、SNS を活用し、日本語ネイティブと外国で勉強する日本語学習者を結んだ作文授業の試みが大塚（2006）や中西他（2011）で行われ、活動の傾向や話し合いを活発にする要因が考察されている。しかし、これらは教師や教師志望の実習生と学習者の活動が中心であり、書き手と読み手の立場が交替しながら行われる学習者同士の PR を検証したものではない。また、非対面 PR の活用の可能性を学習者の意識から考察した浅津他（2012）は、対面 PR と非対面 PR への満足度理由からのみの分析であり、それ以外の要素についても検証が必要である。

そこで、本稿は、非対面 PR において、学習者はピアとの関係構築・維持のためにどのようなコミュニケーション・ストラテジーを用いているのか明らかにすることを目的とする。コミュニケーション・ストラテジーとは「相手の負担を気遣ったり親しさを表したり、人間関係や場面状況などに配慮して、目的を達成するために有効な伝え方」（日本語教育学会編 2005）である。

2. 実践概要

対象としたのは、論文作成技術向上を目的とした日本語上級レベル（N1 合格）の文章表現クラス（大学留学生別科において 2012 年度秋学期開講、全 15 回、中国語話者 6 名、韓国語 2 名、タイ語 1 名）である。この授業の学習目標は、日本語での論文作成技術を向上させることであり、各課の学習項目の確認練習として行う作文課題（以下、課題）の作成過程に非対面 PR を組み込んだ。非対面 PR は LMS の一種である Moodle⁽¹⁾ を使用し、話し合う項目として、ピアの作文課題に関して以下の 3 点を設定した。

- (1) いいところ・自分と同じところ・見習いたいところ
- (2) わかりにくいところ・もっと説明してほしいところ
- (3) (2) の改善案

表 1 に 1 つの課題作成の流れと、作成過程に非対面 PR を取り入れた課題の情報を示す。本実践では、初回から PR や非対面 PR を行うのではなく、第 1 課題の前には PR についての導入を行い、その後、従来型の対面 PR、授業内での模擬的な非対面 PR を行ってから本格的な非対面 PR を開始した⁽²⁾。したがって、本稿の分析データは、第 3・4 課題の作成時に行った非対面 PR において、Moodle 上に残されている合計 2 回分のやりとり（スレッド）である。表 2 には本実践の対象者のインターネット使用状況をまとめる。年齢は 20 代前半が多く、1 日の

ネット使用時間は2～3時間が多かった。

表1 課題作成の流れと非対面PRの実施回

課題作成の流れ [草稿作成 (個人) → 非対面PR+自己訂正 → 完成稿作成 (個人)]

	第1課題	第2課題	第3課題	第4課題
課題内容	序論	実践概要	序論+実践概要	調査結果+考察
PR形式 (グループ 人数)	対面PR (2～3名)	模擬非対面PR (2～3名)	非対面PR (2～3名)	非対面PR (2～3名)
PR時間	授業時間内 (約30分)	授業時間内 (約15分)	授業時間外 約2週間	授業時間外 約2週間
ピア設定	自由 (近くの座 席)	教師編成 4グループ (学生ID)	教師編成 4グループ (学生ID)	教師編成 4グループ (学生ID)

表2 対象者のネット使用状況

年齢	20～24歳：8名 25～29歳：1名
1日の使用時間	1時間未満：1名 2～3時間：8名
使用ツール	Facebook, QQ, LINE, twitter など

3. 結果考察

スレッド分析の結果、非対面PRにおけるコミュニケーション・ストラテジーとして「あいさつ」「感情表現」「敬語・謙遜表現」「ひとりひとりに返信」が確認された。以下、実例をもとに1つずつ見ていく。

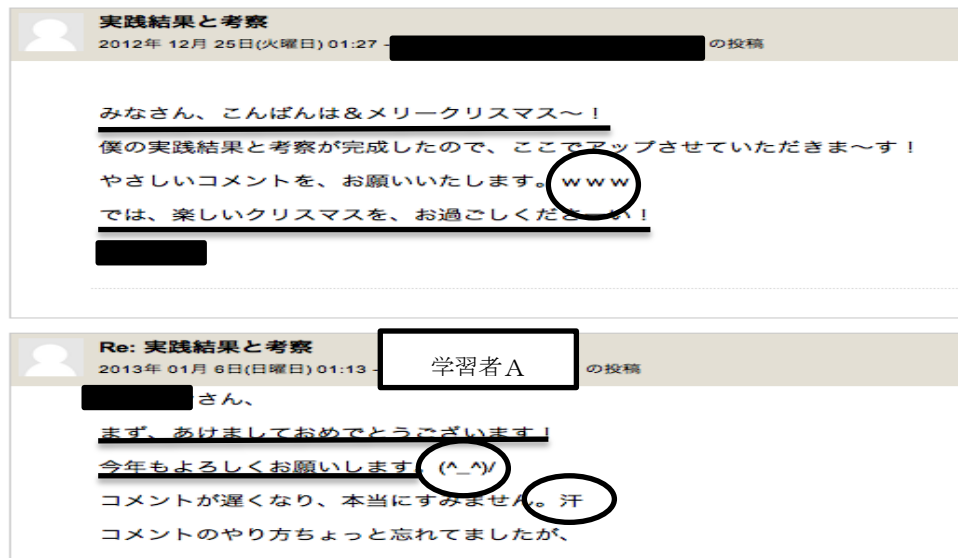
あいさつ

コメントの冒頭では「こんにちは」などの通常挨拶の他に、「メリークリスマス」や「あけましておめでとうございます」といった時候の挨拶を書いていた。(図1下線部)。

これは、対面PRでは「始めます。いい、いい、続けてください」といった「進行」の機能を持つ発話(原田2011)によって話し合いが始められたり、ターンの

交替が行われたりするのに対し、非対面 PR ではログインしてスレッドにコメントを書けばいいため、「進行」のような発話は必要がない。しかし、いきなり作文に関するコメントを書き始めたり、そのようなコメントのみであれば冷淡で無味乾燥な印象を与えてしまう。加えて、否定的なコメントも書く必要がある。そこで、このようなあいさつから始めることによって、コメントが書きやすい「会話の場作り」（堀口 1997）を行っているのではないかと考えられる。

図1 時候のあいさつ

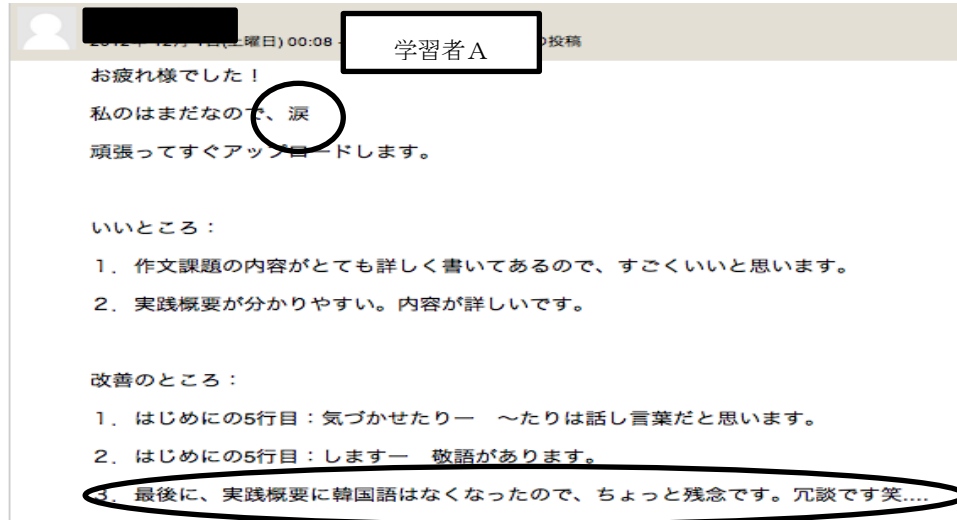


感情表現

コメントを書く際に「笑」や「汗」「T_T」といった心身の状態や感情を表す文字・記号を使用する学習者が9名中5名に見られ、冗談を書く学習者も見られた。特にこの特徴が顕著だった学習者 A の例を図1と2の○で囲った部分に示す。

これは、文字だけでは伝わりにくい気持ちや表情を記号によって伝えたり、冗談によって親しみやすさを出したりすることで、リラックスした雰囲気を作り出しており、前節の「あいさつ」と同様に「会話の場作り」を行っていると考えられる。また、対面型の PR を分析した原田 (2011) では、話し合いの中の発話機能として、感謝や冗談などによるピアとの「関係作り」が確認されている。非対面 PR での話し合いにおけるこのような感情表現は「関係作り」にも相当するのではないかと考えられる。

図2 感情表現 (学習者A)



敬語・謙遜表現

ピアに対して否定的なコメントをする場合、まずは相手のいいところを一言述べておくというパターン (図3 下線部) と、謙遜的なフレーズを述べるというパターン (図4 下線部) が確認された。ほかにも「ないと思いますが、ちょっと変えたら、もっともっと分かりやすくなるというようなところがあります」や「細かいところなんです」などが見られた。

図3 前置き

文章はよくまとめてはいますが、少し引っかかることもあります。

1. 素朴な指摘ですが、1-2がありますが、1-1は見つかりません。そして、数字は:
2. 「はじめに」の第二段落ですが、「異なる方法によって作成する作文の比較が不

図4 謙遜

つまらないことですが、ページレイアウトをちゃんと揃えて、きれいにしたほうがいいと思います。

これは、前節で見られたようなコメントのしやすいリラックスした雰囲気であっても、他者を評価するにあたって丁寧で謙虚な姿勢を表しており、ピアに配慮しようとする学習者の姿勢が見られる。

また、敬語使用に関しては、このほかにも他者の影響を受けていると考えられる例が見られた。図5では、学習者 a1 が「コメントを述べさせていただきます」、学習者 a3 が「コメントさせていただきます」と述べている。学習者 a2 はコメントに対する礼を述べるにあたって「参考にさせていただきます」（点線部）と述べている。この A グループでは、この後のやりとりでも、「させていただきます」の言い方が多く使われ、特にコメントする際に「コメント（を述べ）させていただきます」が多用されていた。

図5 使い方の影響

2012年 11月 27日(火曜日) 15:00 学習者 a1 の投稿

こんにちは。
同じクラス()です。
今()さんの文章について、コメントを述べさせていただきます。
よろしくをお願いします。

1、構成はよく揃えてあります。
2、ピアの効果や定義をちゃんと説明してくださいました。
わかりにくいところ：
1、日本語のレベルどうやって判断するのですか。
2、第1回作文の内容を変えるのは、どうしてですか。

改善案：
1、対象者は全員中国語母語者しないで、ほかの母語者も加えていればどうですか。
2、表1 対象者の情報 という所をプロフィールに変えていただいたらどうですか。

2012年 12月 1日(土曜日) 15:00 学習者 a2 の投稿

コメントありがとうございます！参考にさせていただきます。

2012年 12月 1日(土曜日) 20:19 学習者 a3 の投稿

こんばんは。ヘルプしてくれてありがとう。やはりブラウザの問題で、IEでやったら開きました。では、コメントさせていただきます。よろしくをお願いします。

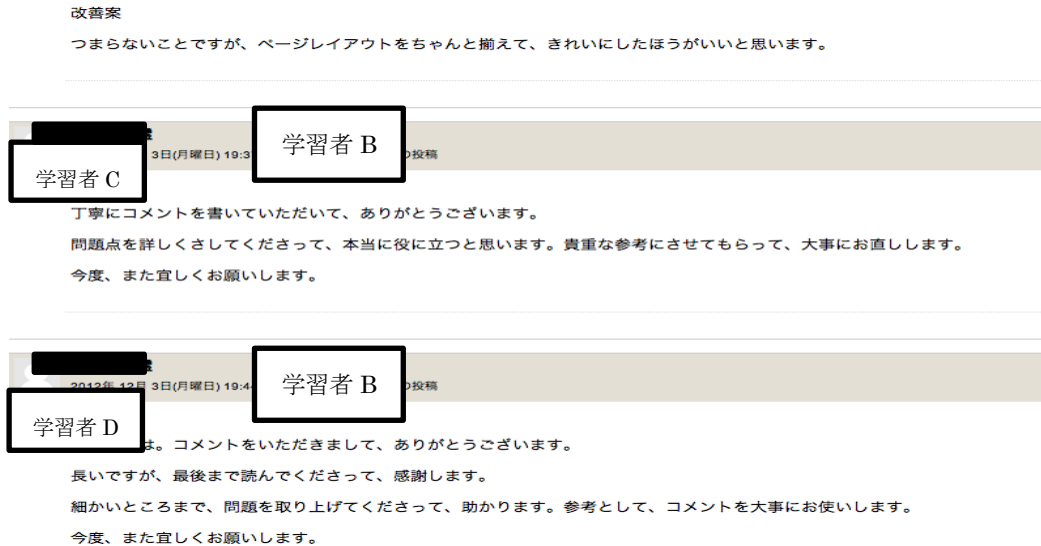
このように、学習者は敬語の使用について他者の使い方を意識しており、影響を受けているのではないかと考えられる。

ひとりひとりに返信

ほとんどの学習者が、コメントをくれたメンバーのピアに対して返信をしないか、まとめて1つのスレッドで返信をするのに対し、2名の学習者はメンバーひ

とりひとりに返信をしていた。図6では、学習者Bが同じグループの学習者CとDそれぞれに別スレッドでコメントへの礼を書いている。

図6 ひとりひとりに返信（学習者B）



学期終了後、学習者Bにメールでその理由を確認したところ、次のような返事が返ってきた。

学習者Bの意識

グループのメンバーたちがクラスメートというが、そういう親しい友達とは言えないと思います。ちゃんと返事を書いた方が親切だと思いますし、PRという形式なりの効果も出てくるかもしれないと考えています。

(原文のまま・下線は筆者による加筆)

この学習者は、コメントの書き方でだけでなく、あまり親しくないピア達ひとりひとりに返信するという行動によってメンバーとの関係を構築・維持しようとしている。また、そうすることはPRの目的に合うことであるとも考えており、PRという協働学習の目的を理解して取り組んでいることがわかる。

4. まとめ・今後の課題

本稿の目的は、非対面PRにおいて、学習者はピアとの関係構築・維持のため

にどのようなコミュニケーション・ストラテジーを用いているのか明らかにすることであった。スレッド分析の結果、4つのコミュニケーション・ストラテジーが確認され、非対面 PR において、学習者はピアとの関係を構築・維持しようとしていることがわかった。これはつまり、非対面 PR には、文字によるコミュニケーション能力の育成の可能性があると言える。

今回の実践を踏まえた今後の課題は次の5点である。

- (1) 今回確認されたコミュニケーション・ストラテジーが、話し合いにどのような影響を与えているのか、ピアへの意識調査をもとに明らかにする
- (2) 非対面 PR による作文プロダクトへの効果（得点変化）の分析を行い、従来の対面型 PR と比較する
- (3) 人間関係構築への影響やプロダクトへの効果をより詳細に検証するため、非対面 PR を複数回実施して過程を記録・分析する
- (4) (3) を通して、非対面 PR における教師の役割を考える
- (5) Moodle のようにパソコンを立ち上げ、ログインして参加するツールより、スマートフォンや twitter のような SNS を活用することで、手軽にコメントができるような活動にする

注

- (1) 本実践で利用した Moodle は、大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト出資による(株)ラーニングシステムの管理下のものである。
- (2) PR の導入方法については田中(2011)を参考にした。

参考文献

- 浅津嘉之・田中信之・中尾桂子(2012)「学習者の意識分析から考える日本語作文授業における非対面ピア・レスポンスの可能性」
- 池田玲子・舘岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 大塚薫(2006)「インターネットコミュニティを利用した双方向型遠隔作文授業の試み」2006年度日本語教育学会秋季大会(熊本・熊本県立大学)口頭発表要旨
- 田中信之(2011)『日本語教育におけるピア・レスポンスの研究—有効性と自律性の観点から—』金沢大学大学院社会環境科学研究科博士論文
- 中西久実子・村上正行・上田早苗(2011)「SNSを活用した日本語教育実習生と日

本語学習者の協働学習—SNS 上での交流を活発にする要因とは」『教育システム情報学会誌』28 (1), 61-70

日本語教育学会編 (2005) 『新版 日本語教育事典』, 大修館書店

原田三千代 (2011) 『「協働性」に着目した第二言語教室活動としてのピア・レスポンスの研究—活動プロセス・作文プロダクト・学習者の認識の観点から—』
外文出版社

堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版

三代純平 (2009) 「留学生活を支えるための日本語教育とその研究の課題 社会構成主義からの示唆」『言語文化教育研究』7 & 8, 65-99

本研究は、平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)の基盤研究(C), 課題番号:24520598, 研究課題名:「ピア・レスポンスの何が文章の質的向上と評価結果に影響するのか」の助成を受けた研究成果の一部である。